
Let's Go Steady with Computer Technology !

(1) For Developing a Good Relationship with "Man of the Year"

保崎 則雄

前は new media の外国語教育への利用について述べたが、今回は computer の教育活動への利用を考えてみたい。大学は事務的な情報、学習に関連した情報と大きく 2 種類の情報を基礎として運営されている。この両面の情報の data base の構築に computer は安価に利用できる便利な media である。

たとえば computer 通信の、network の host に大学、学部、学科、センターがなるというのはどうであろうか。いくつかの大学、会社などはすでに、PC-VAN や Nifty-Serve といった商業ベースの情報 network を利用したり、また独自の network を作り、社、校内外の情報の一般化、迅速化、廉価化が計られている。まずは、electronic mail、electronic meeting、electronic bulletin board のような事務面での情報源、手段として、その日あるいは、その週の行事予定、会議の予定（実際に会議も行なう）、入試、スポーツ行事の予定などを大学 host 局の data base に入れておくのである。Network を教職員用、学生用、受験生用等とさらに細かく分けてもよいが、基本的には、現在同種類の情報が複数経路で存在、移動している不便さを鑑み、情報作成、利用者にわかりやすいように情報を系統化するという発想である。こ

の system によって情報作成、収集、頒布の時間が短縮され、使用時の空間的柔軟性も計られる。Computer を電話／データ回線でつなぎ学内（自宅でも）にいくつか設置することにより、必要な大学の情報を誰でも簡単に手に入れられることになる。また、事務連絡面では、お互いにそれぞれの研究室、建物へいちいち足を運ぶ手間はかなり省くことができる。学内 network の発想と一致する部分もあるだろうが、実は主に提案したいのは、次の教育活動の一部としての computer technology の利用である。

数年前、私は米国で電話による外国語学習の研究プロジェクトに誘われ、時間の都合がつかなく断念したことがあるが、その発想を computer technology によりさらに進めて、外国語研究センターの network に外国語学習 lesson（もちろん文学その他を含めて）を入れるということを提案したい。技術的、理論的なことはまた機会をみつけ触れることにして、ここではその発想、理念のみを手短に述べる。

Network 利用にあたっては、教授活動の自由化、柔軟化のためにたとえば学習者を限定してもよいし、学習者に menu より選択させる、あるいはあ

るレッスンをある教科の一部として必修とさせることもできる。学習活動の規模についても個人レベルからゼミ、クラス単位というように大小考えられる。また open university, continuing education, distance education ひいては大学の public relations 等のためにも一般市民に無料／有料で開放／利用できる部分を残しておくことが大切である。

別の面からもこの学習方法にはいくつかの利点が考えられる。講義室以外でも computer と電話回線があれば、学習あるいは、学習準備（レポートの提出、質疑応答を含めて）ができるという点である。（実は、それだけの system で、すでに画像も地球の裏側とでも比較的安価に送受信できるのである。）教員の顔を見ないほうが、質問しやすいという学習者が結構いることは同種の学習 system の研究報告でも明らかにされている。また、curriculum に関連する部分では学習の記録を教授者側に残せるようにすれば、学習進捗状況を monitor できる。その結果学習者はより真剣になる。

ただし、こういった学習 system の場合、担当者は何時間かの office hour を設けて学習者との効果的な communication を計ることが必要である。決して楽はできないが、少なくとも楽しくやれる。きちんと monitor し、評価を出すことが肝心である。要は、簡素化できるところはできるだけ簡素化して、時間をかけるべきところはある

だけ多くの時間、労力、設備を効果的に活用するのである。学習者個人個人に目の行き届く教育を行なうことが可能なのである。つまり今までの教育においては、何かのために人間を動かすという発想がややもすると中心であったがこれからはその発想だけでなく、情報を動かすという発想への転換も要求される。学習活動においても人間を移動させることは多くの場合、最も不確定で、時間、労力、金がかかるということに気付けば、こういう system が自然な学習形態の一つであることがわかるであろうし、今後は10-20%の範囲でこういう学習形態があってもいいであろう。

ひとこと付け加えておくと、現在の講義方式も何割かの部分で残しておく必要があることは言うまでもない。いつも指摘しているように伝統的なものの上に新しいものをうまく加味していくこと、そしてその変化を必要以上に恐れないこと、これが一番肝心である。たとえば、全ての者が computer を利用していかなければならないという発想ほど単純で、危険な考えはないのであるから。

教授活動に computer を導入したからといって、どれだけ効果が期待できるかまだ未知の部分も多くある。しかし、何か新しいもの、異なったものにたいして積極的に取り組み、取捨選択／消化していくからこそ我々は研究者といわれるのではないだろうか。学習者が年々変化していることだけは動かしがたい事実である。

☆お知らせ☆

’91神奈川大学語学教養講座

1. 開講期間 1991年2月25日（月）
～3月8日（金）
（土・日を除く10回）

2. 主催および会場 神奈川大学
外国語研究センター

3. 開講講座名 ① 英語講座（語学）
② 英語講座（教養）
③ スペイン語講座
④ 中国語講座
⑤ ドイツ語講座
⑥ フランス語講座

4. 講師
5. 募集対象

6. 募集人数
7. 受講料

⑦ ロシア語講座

（ただし講座名は仮名）

神奈川大学外国語学部教員
（非常勤講師を含む）
おもに横浜市内及び近郊に在住、在勤の社会人（大学生・高校生も可）で、現在の語学力を問わず、意欲のある方。
各講座 20名
各講座 7,000円（教材費を含む）
ただし、2講座受講の場合は12,000円